第10回 特別支援教育実践研究会実践研究発表会 及び
令和３年度 実践場面分析演習発表会 発表要旨

日時：令和４年２月５日（土）10:30～11:30
方法：オンライン形式（zoom） 発表番号が奇数のグループは前半、偶数は後半に発表を行います。

【発表１】

発表題目：知的障害児を対象としたすごろくを用いた数量概念の支援②－数字の読みに着目して－
発 表 者：井上 和紀（新潟市立漆山小学校）
発表要旨：

熊谷，山本(2018)は，数処理（数詞，数字，具体物［あるいは数空間］の変換）の困難な子に対して，すごろくが有効であるとしている。また，このような子どもたちのつまずきの背景には，認知的な困難があると考えられるとしている。

前回，ダウン症のＡ児が「ちびむすドリルＨＰ」内の「食べ物すごろく」と「言葉の発音練習すごろく」に取り組んだ事例を報告した。まだ指導者といっしょでないと，さいころの目を読んだり，コマを進めたりするのは難しいことが分かった。

今回は，ダウン症のＢ児が、同 HP 内の「食べ物すごろく」（２種）に取り組んだ事例を報告する。第１回～第１６回の結果と、間を置いて実施した第１７回以降の結果を比べると，どちらもさいころの目が大きくなるほど，コマの誤操作が多くなる傾向があることが分かった。そこで，大きい数でもコマを正しく進められるように，支援方法を考える。

【発表２】

発表題目：通常学級における ADHD 児への学習支援
発 表 者：岩下 史弥・岡田 由希子・片原 ちなみ・佐藤 絢美・西山 賢・池田 吉史（上越教育大学）
発表要旨：

支援対象となる小学校１年生の児童Ａは通常学級に在籍し、ADHD 特性がある。支援当初、離席や授業妨害、担任への暴言・暴力などがあり、ほとんどの学習活動に参加できていない状態であった。院生間での定期的な情報交換及び担任・通級教員と月一回のケース会議を行い、Ａの長期・短期目標、支援方策、評価などを設定した。関係者で足並みを揃えた支援を実施することで、院生による個別支援の段階から、Ａが全体の活動に参加する段階へと移行できるようにした。

【発表３】

発表題目：特別支援学校（聴覚障害）小学部児童を対象とした語彙習得に関する学習指導の効果
発 表 者：秋元 梨沙・野本 理紗・坂口 嘉菜（上越教育大学）
発表要旨：

音声情報の獲得の困難さから、聴覚障害のある児童は獲得語彙数が少ないことが古くから指摘され、また、これらのことが日常生活でのコミュニケーションや読み書きの困難に影響を及ぼしていると考えられている。本研究では、特別支援学校（聴覚障害）に在籍する児童３名を対象とし、朝の会でのやりとりを通した語彙習得の効果について検討を行った。本発表では、朝の会で用いられた語彙及び確認テストの分析結果及びその考察を報告する。

【発表４】

発表題目：病弱児の認知特性に応じた漢字指導に関する事例研究－ワーキングメモリに注目して－
発 表 者：小林 航平・今井 里菜・馬場 詠万・八島 猛（上越教育大学）
発表要旨：

病弱児は学習に困難を抱える場合があり，その要因の１つに認知特性に困難を示すことが挙げられる。学業成績と密接な関連があるとされているワーキングメモリを補うことで，学業成績が上昇すると考えられる。そこで本研究は，病弱児１生徒に対して，ワーキングメモリに配慮した漢字指導を行い，効果の検証を行った。その結果，小学校５年配当漢字の習得度が２割上昇し，読み書きスクリーニング検査と漢字検定６級問題においても指導効果が見られた。

【発表 5】

発表題目：チームによる動作法を参考とした姿勢・動作改善の取組

発 表 者：立野 雅也・西丸 香輝・大和 仁美・笠原 芳隆（上越教育大学）

発表要旨：

肢体不自由に困難を抱えているトレーニー3 人に対して，それぞれチームを構成し，動作法を参考にした心身に対する訓練を行った。その中で実態把握から目標設定を行い、見直し改善を行った成果を報告する。

それぞれのチームで指導を行う際のチーム内での役割分担の明確化や，トレーニーの実態をこまめに共有し，それに基づいた訓練を行った。その結果、それぞれのトレーニーが困難の改善をすることができ、多様な指導や支援の知見を得ることができた。

【発表 6】

発表題目：聾学校小学部に在籍する聴覚障害児を対象とした国語の授業実践

発 表 者：市ノ瀬 昌志・濱中 美緒・宮崎 華帆・小林 優子（上越教育大学）

発表要旨：

聾学校小学部 3 年次に在籍する聴覚障害のある女児 1 名の授業（国語・算数）の参観と授業実践を行った。聾学校における授業実践や支援方法について学び，聴覚障害児を対象とした教科指導の実践力を身につけることを目的とした。聾学校教員の行う支援や工夫を学び，それをもとにより理解を深めることができるよう言葉の選定や動作など非言語コミュニケーションの工夫をした。実践から得た気づきや課題について，国語の授業実践を中心に報告する。

【発表 7】

発表題目：知的障害教育臨床実習

発 表 者：星　夢月・真玉橋 マリア・伊藤　優・温　楠錫・川井 拓郎・下田 祝子・髙橋 美月・西出 光穂
（上越教育大学）

発表要旨：

知的障害や ASD を伴う知的障害のある就学前の幼児を対象に、週 1 回の臨床実習を実施した。子どものねらいは、共同的な学習や仲間とのやりとり体験やスキル形成を通して就学を見据えた力の育成とした。受講者は、子どもの行動理解、指導計画の作成、指導と評価に関する基礎的な技術と実践的な指導力の習得を目指した。子ども一人ひとりの実態に応じた個別指導と、仲間同士のやりとりを含む小集団指導を実施した成果を報告する。

【発表 8】

発表題目：視覚・重複障害児への音楽指導に関する試行的検討

発 表 者：西出 光穂・佐藤 将朗・大庭 重治（上越教育大学）

発表要旨：

本実践では、視覚特別支援学校で行われている 3 名の視覚・重複障害児への音楽指導に関して、主体的に音楽を楽しむという観点のもと、音楽の指導内容や方法について検討した。音楽指導では曲の難易度ごとの対象児の反応を視覚障害の程度とコミュニケーション能力に注目し、評価した。その結果、主体的に音楽を楽しむ姿について、弱視よりも全盲の方が主体的であり、言葉によるコミュニケーションの有無も影響を与えていた。